

入選

「家族への感しやの気持ち」

三重県 四日市市立内部東小学校 四年 丹羽 英人

去年のゴールデンウィークの前に、

「お父さんが、かん国へ転ぎんになったの。かん国の家の近くには、日本人学校がないから、げん地校に通うことになるわ。」

と、お母さんから聞いた時、ぼくはとてもショックだった。それを考える度に、なみだが出た。それでも、かん国語をおぼえて、げん地校でがんばるしかない、あきらめていた。

しかし、それから何日かして、お父さんとお母さんが、

「げん地校に通うのがいやだったら、日本に残ってもいいんだよ。どこの学校に通うかは、英人が決めていいよ。」

と、言ってくれた。ぼくは、お父さんとはなれて生活するのがぜつ対にいやだったから、毎日ものすごくやんだ。でも、やっぱり日本に残ろうと決めた。なぜなら、かん国語のじゅ業では、ぼくはとてもついていけないと想ぞうできた。それに、かん国語をおぼえるまで、一日中、だれとも一言も話せないし、まわりの人が話している事も全く分からないと思っただからだ。図書室へ行っても、本も読めないだろう。そんなのとてもがまんできない。それから、ぼくが、かん国語を一生けん命におぼえている間に、日本の勉強がどんどんおくれてしまうのが、特にいやだった。それで、ぼくとお母さんと弟は、日本で今まで通りの生活をする事になった。

この前の春休みに、ぼく達は、かん国のお父さんの家へ遊びに行った。四日市の家に行った時は、家事は全くしないお父さんだったのに、引き出しの中の洋服は、きちんとたたんで入っていた。お父さんは、ゆず茶を飲み終わると、すぐに自分の使ったカップを、台所へあらいにいった。ぼくは、お父さんもがんばっているなと思った。弟は、まだ三才だったのだ。

「どうしてずっとここにいられないの。」

と、お母さんに聞いていた。お母さんが、その理由を説明すると、少しさみしそうな顔をした。そんな顔を見たら、ぼくも何だか悲しくなった。

ぼくは、ぼくの学校のために日本に残って、お父さんとはなればなれの生活をしてきているお母さんと弟に、心から感しやしている。それから、かん国へ単身ふにんしてくれたお父さんにも、とても感しやしている。ぼくは、自分の学校のために日本に残ったのだから、これからも勉強をがんばろうと思う。そして、大人になったら、そんけいするお父さんのような人になって、今のぼくの家族みたいに、たとえばなればなれになってしまっても、いつも心は一つにまとまっている、そんな温かい家族を作りたいと思う。今は少しさみしいけど、こんな生活も、いつかぼくの家族の思い出となる日が来るはずだから。

お父さん、お母さん、理人、ぼくのために本当にありがとう。